幼児期から青年期までの子どもをもつ父母の子育て観の検討

―父母ペア・データを用いた第一子年齢による変化―

神　谷　哲　司

本研究は，子育て家族の多様化を背景として，保護者の持つ子どもの育ちや発達の理解や信念といった観点に着目した子育て観尺度を作成することを目的とした。インターネット調査により2歳から18歳の第一子を持つ父母300組のペア・データを元に，子育て観30項目の因子分析の結果，介入・統制，育つ力の2つの因子が抽出された。養育態度との基準関連妥当性の検証では，介入・統制について関連が確かめられたが，育つ力についてはむしろ養育態度の受容とは異なる，子どもの主体性を重視した考え方を測定していることが示唆された。また，子どもの育ちや結婚満足度とも統計的に有意な関連が見られていた。父母間と第一子年齢で子育て観の差を検討したところ，育つ力では差が見られなかったが，統制・介入では，7－12歳群のみ父親の得点が母親より高かった。これらの結果から，一定程度の子育て観尺度の妥当性と信頼性が確認され，さらなる議論がなされた。

キーワード：子育て，親，家族，結婚満足，養育態度

問題と目的

神谷・荻布・松﨑・川﨑（2023）においては，急激に変化する現代日本における子育ての状況について，従来の「養育態度」研究にこめられた，養育行動の前提となる養育に対する主観的な信念や評価について，「子育て観」（自分の「子育て」や「子ども（わが子）」という対象，あるいは自分自身の子育てという対象に結びついた主観的な信念や評価）として位置づけ，保護者支援や親支援にあたる支援者にとって，保護者・親の子育てに対する考え方や信念・評価について確認するツールとしての子育て観尺度を作成した。しかしながら，この研究では，特定の市の小学生の保護者を調査協力者としていること，その上，プロジェクトの対象となる児童を恣意的に抽出していることが報告されており，必ずしも乳幼児や思春期・青年期の子どもを持つ保護者，あるいは全国に滞在する保護者の支援に適用可能であるとは明らかになっていない。

そこで本研究では，神谷ほか（2023）で作成された子育て観尺度を元に，さらに広範な年齢を対象

＊教育学研究科　教授

とした，子育て支援に資する子育て観尺度を作成することを目的とする。年齢を広範にとらえることは，一般に，子育て支援は乳幼児を抱える保護者が多いものの，子どもの育ちそのものは小学校就学で終わるわけではなく，むしろ，「小1の壁」をはじめ，その接続そのものも問題になっており（内閣府，2015），さらには青年期を通して社会へ参画するまでを支援の範疇としてとらえられることから（内閣府，2014），幼少期から成人（18歳）までを想定することとした。

尺度の作成にあたっては基準関連妥当性の確認のために既存の養育態度尺度を用いるほか，夫婦関係の指標として結婚満足度と，子どもの育ちの状況についても尋ね，子育て観との関連も検討する。夫婦関係の満足度については，父母ともに応答的，統制といった養育態度に関連が見られていることから（江上，2013），一定程度の関連が想定され，子どもの育ちについても，養育態度はもとより子供の育ちに影響を与える親側の要因として想定されているものであり，これまでにも幼児の攻撃行動や（中道・中澤，2003），青年のアイデンティティ（平田，2018）などとの関連が確かめられているためである。

方法

調査方法と調査協力者

インターネット調査会社に依頼し，（株）クロスマーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニタを対象としたオンライン調査を行った。調査対象者は，第一子が2歳以上18歳以下の第一子を持つ父親と母親をターゲットとし，性別，子ども年齢の偏りを防ぐために，第一子年齢3群（2－6歳群，7－12歳群，13－18歳群）子どもの性別2群について均等割付を行い，配偶者の協力を得られることを条件に回答を依頼した。データの実査は，2023年3月20日から23日の間に行われた。Satisficer 検知は，DQS（Directed Questions Scale; Maniaci & Rogge, 2014）および本調査の画面表示が120秒以内（1項目あたり2秒（Huang, Curran, Keeney, Poposki, & DeShon1, 2012）で全59項目）を用いた。画面表示時間による脱落は5名以下，DQS 項目の通過者／回答者は400/498であり，有効回答率は80.3% であった。これらのデータから，各セグメント50名ずつのデータが納品され，300組600名のデータが得られた。分析には MS Excel 2016, IBM SPSS Statistics 27を用いた。

調査協力者の基礎情報は以下の通りである。母親年齢；23－64歳（M =42.07, SD =7.00），父親年齢；27－67歳（M =44.71, SD =7.65），父親の就労形態；フルタイム277名（92.3%），パートタイム6名（2.0%），フリーランス8名（2.7%），未就労9名（3.0%）母親の就労形態；フルタイム80名（26.7%），パートタイム111名（37.0％），フリーランス7名（2.3%），未就労102名（34.0%），結婚歴；3－39年（M =13.23, SD =6.05），家族形態；核家族240名（80.0%），多世代同居家族60名（20.0%），子ども人数；1人136名（45.3%），2人141名（47.0%），3人20名（6.7%），4人3名（1.0%）であった。

調査項目

子育て観

親や保護者の子育てに対する信念や価値について，どのように育てるものと考えているか，あるいは子どもはどのように育っていくのかといった側面に着目し，特に，従来の親の養育態度や親子関係をとらえる際には，大まかにではあるが，例えば，受容―拒否と自律―統制（辻岡・山本，1976, 1978）といった2つの側面に大別する考え方が成り立つものと考えられることから，予備的・試行的に作成された子育て観尺度（神谷ほか，2023）2因子30項目を一部修正して用いた。選択肢は「そう思わない（1）」から「そう思う（5）」の5件法で尋ねた。「そう思う」ほうが得点が高いことを示す。

子どもに対する養育態度

2歳から22歳までの広範な子どもの年齢を対象とする養育態度尺度として，加藤・黒澤・神谷（2014）の養育態度尺度を用いた。この尺度は，受容・子ども中心10項目，一貫性のない優柔不断なしつけ7項目，統制8項目の3下位尺度からなる25項目の尺度であり，本調査においては，原著者の許諾を得て，加藤ほか（2014）の母親の因子分析結果で因子ごとに負荷量の高い順に5項目ずつを尋ねることとした。また，DQS項目を11番目に固定して，「ややあてはまる」を回答するように指示を行った。選択肢は「ほとんどあてはまらない（1）」から「とてもあてはまる（5）」までの5件法で，得点が高いほど「あてはまる」ようにコーディングを行った。

結婚満足度

夫婦関係や結婚生活に対する総合的な評価として，翻訳されたカンザス結婚満足度尺度（菅原・詫摩，1997）を用いた。「あなたの結婚にどのくらい満足していますか？」など3項目からなり，「1. 非常に不満である」―「7. 非常に満足である」の7件法である。合計し項目数で除した値を算出した。高得点であるほど夫婦関係に満足していることを示す。内的整合性は父親で α =.961，母親で α =.972であった。

子どもの育ち認識

親の認知する子どもの育ちの状況を測定するために，近年耳目を集めている「非認知能力」に着目した。非認知能力は，ヘックマン（2013/2015）をきっかけとし，OECDの社会情動的スキル（OECD, 2015/2018）など展開しながら，日本でも国の調査や委託研究で取り上げられるなど（国立教育政策研究所，2018；東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2022）大きく取り上げられているとともに，子どもの学力や家庭の社会経済状況とも弱い相関がある（山田，2018）ことも示されている。ただし，一方で，その概念は極めて多義的，多様でもあり，不明瞭なままに一般に膾炙された感は否めず，整理が必要であることが指摘されている（西田・久保田（河本）・利根川・遠藤，2018）。そこで，本研究では，簡易的ではあるが，非認知能力あるいはそれに類するものとして

取りあげられる心理学特性を扱った小塩（2021）の章立てを参考に，子どもの育ち認識を示す項目を10項目独自に作成した。

質問にあたっては，「あなたのお子さま（複数いらっしゃる場合は，一番上のお子さん）についてお尋ねします。あなたのお子さんは，以下の項目それぞれについて，どれくらいあてはまりますか。あまり考え込まないで，普段の対応を思い起こして，最もあてはまる選択肢を1つ選んでください。」と教示し，「ほとんどあてはまらない（1）」から「とてもあてはまる（5）までの5件法で回答してもらった。

フェイスシート

モニタ回答者に対して，自身の年齢と職業と就業形態および，配偶者の年齢と職業，就業形態を尋ねるとともに，子どもの人数と年齢および性別，家族形態（核家族か否か）を尋ねた。

倫理的配慮

調査会社での実査にあたっては，回答画面の冒頭に，調査協力の依頼として調査の目的と回答方法，回答は途中で中断できること，収集されたデータは個人が特定されない形で公表されることを明記し，調査協力が得られた場合にのみ回答に進むようにした。また，回答を最後まで完了したことで，調査の主旨に承諾したことを意味する旨伝えた。

結果

子育て観の因子分析

子育て観30項目について，父母それぞれ記述統計を算出したところ，平均値±1*SD*を基準とした天井効果，床効果は確認できなかった（付表参照）。さらに，項目ごとに父母間で対応のある*t*検定を行ったところ，「6子どもの教育は，少しでも早いうちから始めたほうが良い」（t（299）=-2.17, p <.05），「15子どもの健全な心の育ちのためには，怒りや悲しみなどのネガティヴな体験はしない方が良い」（t（299）=-2.43, p <.05），「17子どもの成長・発達はだいたいみんな同じようにすすんでいくものである」（t（299）=2.05, p <.05），「19子どもを育てるときには，子どもが自分の力を発揮できるまでじっくりと待つことも必要である」（t（299）=-2.17, p <.05），「21子どもが，生活環境に不適応をおこさないように，大人が常にかかわっていく必要がある」（t（299）=-2.50 p <.05），「23子どもが社会に関わっていくためには，大人がきちんと指導していかないといけない」（t（299）=-2.06 p <.05）の6項目で有意な差が認められたため，父母それぞれに因子分析を行うこととした（表1）。

表1　子育て観因子分析結果

	父親		母親	
	F1	F2	F1	F2
子どもができないことは，大人がしっかりとできるようにさせるものだ	**.71**	.02	-.02	**.67**
子どもができないことは，大人がきっちりと教えていかなければならない	**.70**	.06	.04	**.64**
子どもが社会に関わっていくためには，大人がきちんと指導していかないといけない	**.60**	.29	.27	**.57**
子どもが戸惑ったり，困ったりしたときは，大人が早く解決方法を示した方がよい	**.55**	-.18	-.11	**.44**
子どもが，生活環境に不適応をおこさないように，大人が常にかかわっていく必要がある	**.53**	.13	.03	**.56**
子どもが楽しく遊ぶためには，大人がその環境を整える必要がある。	**.49**	.13	.13	**.50**
子どもの教育は，少しでも早いうちから始めたほうが良い	**.48**	-.07	.08	**.49**
子ども同士がけんかをしていたら直ちに止めるべきだ	**.48**	-.22	-.26	**.44**
子どもは大人に教えられたとおりに学んでいくものだ	**.46**	-.22	-.22	**.46**
子どもにはその子どもなりに，他者とうまくかかわっていこうとする力がある	-.12	**.72**	**.71**	-.01
子どもを育てるときには，子どもが自分の力を発揮できるまでじっくりと待つことも必要である	-.06	**.59**	**.60**	-.07
心理検査や発達検査では，子どもの心のすべては分からない	-.07	**.56**	**.63**	-.06
子どもは一人でいても，自分なりに様々なことを学ぶ力を持っている	-.13	**.53**	**.72**	-.06
子どもには子どもにしか見えない「世界」があるので，その世界を壊さないようにする姿勢が大事である	.09	**.50**	**.64**	-.01
運動機能や言語機能といった子どもの諸機能は相互に連関しながら発達する	.20	**.48**	**.59**	.08
大人が心掛けるべきなのは，子どもが子どもでいられるようにすることである	.10	**.46**	**.44**	.08
子どもの育ちにとっては，悲しさや悔しさを感じ，多少は傷つくことも大事だと思う	-.02	**.43**	**.50**	-.03
因子間相関		.06		.20

父親の子育て観尺度30項目について最尤法で因子分析を行ったところ，固有値の減衰は5.05, 4.32, 2.28, 1.40, 1.07, 1.00, .92…であった。もとより2因子を想定していたこと，スクリー基準でも2因子が妥当であると判断されたため，2因子を指定してプロマックス回転を施した。また，母親にも30項目について同様の因子分析を施した結果，固有値の減衰は，5.23, 4.20, 2.53, 1.46, 1.35, 1.09, 1.00, .93…であり父親と同様2因子が妥当であると判断されプロマックス回転を施した。その結果，概ね，「26子どもができないことは，大人がしっかりとできるようにさせるものだ」「23子どもが社会に関わっていくためには，大人がきちんと指導していかないといけない」といった大人の介入・統制に関する因子と，「9子どもにはその子どもなりに，他者とうまくかかわっていこうとする力がある」「19子どもを育てるときには，子どもが自分の力を発揮できるまでじっくりと待つことも必要である」といった子どもの育つ力を重視する因子にまとまっていたが。ただ，因子負荷量 .40を基準とした場合，父母共に多重負荷が見られた1項目（番号7），父母いずれかが無負荷であった10項目（番号1,2,5,11,15,17,18,22,27,28）および，父親と母親で負荷量が高い因子が違っていた1項目（番号12）について，削除した上で再度同様の因子分析を行い，その結果，無負荷であった1項目（番号14）を削除して再々度，因子分析を行った。最終的に，上述の大人の介入・統制に関する因子（父親の第1因子，

母親の第2因子）と子どもの育つ力を重視する因子（父親の第2因子，母親の第1因子）とにまとまったためそれぞれ，「介入・統制」ならびに「育つ力」と命名した。

養育態度尺度

DQS 項目を除外した養育態度について，今回，先行研究（加藤ほか，2014）から項目数を減じて使用したため，15項目について父親，母親それぞれ最尤法による因子分析を施したところ，父親で固有値の減衰は3.30，2.76，2.51，.97…，母親で3.45，2.87，2.38，.93…であった。父母ともに3因子によるプロマックス解の結果では，父親の統制における「言いつけに対して子どもが不平をいうと、言いつけをとりやめることがある」の負荷量が，.38であった以外は，いずれも負荷量 .40以上であり，父母ともに単純因子構造を取り，各因子は，加藤ほか（2014）と同様，統制，受容・子ども中心，一貫性のないしつけと同じ因子を構成していた。各因子を下位尺度とみなし，5項目ずつ内的整合性を算出したところ父親で，統制 α =.84，受容・子ども中心で α =.77，一貫性のないしつけ α =.77，母親の統制で α =.84，受容・子ども中心で α =.82，一貫性のないしつけで α =.76であった。

子どもの育ち認識

子どもの育ち認識10項目について，まず，父母別に基礎統計量を算出し，平均値±1*SD*で天井効果，床効果を確認したところ，「9『自分なんかダメなんだ』とよく言う（R）」の項目が父母共に床効果が見られた。そこで，この項目を除いた9項目を対象に父母ごとに主成分分析を行った。主成分分析を行ったのは，分析対象となった9項目で子どもの育ち認識という主成分を抽出し，一次元で検討することを目的としたためである。その結果，父母ともに，9項目すべてで成分負荷量が .40を超えており，寄与率も父親で42.23%，母親で41.62% であった（表2）。また，負荷量が負であった「7自分の感情に振り回されてしまいがちだ」を逆転項目として処理し，内的整合性を算出したところ，父親で α =..82，母親で α =.83であった。父母共に9項目の平均値を子どもの育ちの認識得点とした。

表2　子どもの育ち認識の主成分分析結果

		父親	母親
6	自分の気持ちをうまくコントロールする	.76	.78
10	いやな気持になっても，気持ちが折れずにがんばる	.74	.79
2	難しいことにも粘り強く取り組もうとする	.72	.76
3	ここぞというときによく我慢する	.69	.68
5	先を見越して，自分の行動を調整する	.68	.61
4	自分の考えに対して，あとで客観的に振り返る	.65	.71
8	友達の気持ちを汲み取って動こうとする	.63	.65
1	さまざまなことを学ぼうとする意欲を持っている	.46	.44
7	自分の感情に振り回されてしまいがちだ (R)	-.43	-.41
	固有値	3.80	3.93
	寄与率	42.23%	41.62%

子育て観と関連変数との相関

各尺度の基礎統計量ならびに相関係数を表3，4に示す。父親の介入・統制は母親の介入・統制，ならびに父親自身の養育態度の統制との間に中程度の正の相関が見られていた。父親の育つ力は，母親の育つ力と中程度の正の相関が見られたほか，父親の統制と弱い負の相関が，母親の受容・子ども中心と弱い正の相関が見られていた。

母親の介入・統制は，母親自身の養育態度の統制と中程度の正の相関が見られ，受容・子ども中心

表3　各尺度の基礎統計量

	父親		母親	
	M	*SD*	*M*	*SD*
CR_F1育つ力	3.18	(0.61)	3.25	(0.55)
CR_F2介入・統制	3.96	(0.53)	3.97	(0.53)
PA_F1統制	2.29	(0.81)	2.59	(0.79)
PA_F2受容・子ども中心	3.42	(0.72)	3.81	(0.72)
PA_F3一貫性のないしつけ	2.35	(0.77)	2.22	(0.67)
結婚満足度	5.06	(1.37)	4.67	(1.57)
子どもの育ち認識	3.21	(0.68)	3.22	(0.67)
		N=300		*N*=300

註）CR：子育て観，PA：養育態度

表4　子育て観と各尺度の相関係数

	父親		母親	
	介入・統制	育つ力	介入・統制	育つ力
CR_F1介入・統制（父）	1.00	.02	.46 ***	.12 *
CR_F2育つ力（父）	.02	1.00	.12 *	.56 ***
CR_F1介入・統制（母）	.46 ***	.12 *	1.00	.13 **
CR_F2育つ力（母）	.12 *	.56 ***	.13 *	1.00
統制（父）	.42 ***	-.25 ***	.07	-.08
受容・子ども中心（父）	.12 *	.18 **	.18 **	.13 *
一貫性のないしつけ（父）	.10	-.17 **	.03	-.13 *
統制（母）	.18 **	-.03	.42 ***	-.20 ***
受容・子ども中心（母）	.18 **	.24 ***	.21 ***	.39 ***
一貫性のないしつけ（母）	.04	-.17 **	.03	-.23 ***
結婚満足度（父）	-.11 *	.19 **	-.09	.13 *
結婚満足度（母）	-.07	.14 *	.03	.07
子どもの育ち認識（父）	-.02	.06	.13 *	.05
子どもの育ち認識（母）	.08	.11	.12 *	.22 ***

N = 300（父母とも），* p<.05，** p<.01，*** p<.001

と弱い正の相関が見られた。母親の育つ力は，母親の養育態度の統制と一貫性のないしつけとの間に極めて弱い負の相関が見られ，受容・子ども中心との間にやや弱い正の相関が見られていたほか，母親自身の子どもの育ち認識との間に極めて弱い負の相関が見られていた。

子育て観の父母間と第一子年齢による違い

子育て観が，父母間および第一子年齢によって違いがあるかどうかを検討するために，介入・統制ならびに育つ力をそれぞれ従属変数とし，第一子年齢を2－6歳，7－12歳，13－18歳の3水準で独立変数，ならびに父母間の繰り返しを独立変数とする，なし×ありの2要因分散分析を施した（表5）。介入・統制では，年齢の主効果で，F（2,297）=1.42, *n.s.* η_p^2 =.01, 父母間の主効果で F（1,297）=4.583, p <.05 η_p^2 =.015, 交互作用が F（2,297）=9.412, p <.001, η_p^2 =.060であった。交互作用が有意であったので，単純主効果の検定を行ったところ，父親で7－12歳の方が13－18歳よりも高く，2－6歳と13－18歳では母親の方が父親よりも高く，7－12歳では母親の方が父親よりも高いことが示されていた。また，育つ力では，第一子年齢，父母間の主効果ならびに交互作用について，いずれも有意な差は見られなかった（順に，F（2,297）=0.674 *n.s.* η_p^2 =.005, F（1,297）=0.026 *n.s.* η_p^2 =.000, F（2,297）=2.261 *n.s.* η_p^2 =.015）。

表5　第一子年齢と父母間による子育て観

		2－6歳	7－12歳	13－18歳	
統制・介入					註）
父親	*M*	3.19	3.30	3.04	性別 F =4.58, p <.05 η_p^2 =.02 年齢 F =1.42 *n.s.* η_p^2 =.01 交互作用 F =9.41 p <.001 η_p^2 =.06 父親：7－12歳 >13－18歳 2－6歳，13－18歳：母親＞父親 7－12歳：母親＜父親
	SD	（0.65）	（0.59）	（0.56）	
母親	*M*	3.33	3.17	3.25	
	SD	（0.57）	（0.55）	（0.51）	
育つ力					
父親	*M*	4.01	3.88	3.94	性別 F =0.03 *n.s.* η_p^2 =.00 年齢 F =0.67 *n.s.* η_p^2 =.01 交互作用 F =2.26 *n.s.* η_p^2 =.02
	SD	（0.56）	（0.50）	（0.50）	
母親	*M*	4.00	4.00	3.97	
	SD	（0.52）	（0.59）	（0.49）	

註）いずれも性別は df =（1,297），年齢と交互作用項は df =（2,297）

考察

本研究は，子育て家族が多様化している現在，保護者がどのような子育て観を持っているかについて，「子どもにかかわることが子どもの育ちや発達にどのように影響を与えると考えているか，あるいは，子どもの育ちや発達がどのようなメカニズムによって進むと素朴に考えているか」といっ

た側面に着目して先行研究をベースに新たに尺度を作成し，さらに，結婚満足度や子どもの育ち認識との関連，ならびに第一子年齢による得点の違いについて，子どもの広範な年齢を対象に検討した。

子育て観尺度は，多くの養育態度研究において統制と受容の2次元が採用されていること，さらに保育業界における発達観においても，保育者の指導性を重心する系統主義と児童中心主義の2つの考え方が対比されがちなこと（中島，2015）を踏まえ，さらには因子分析の結果からスクリー基準でも2因子であったことを踏まえ，「介入・統制」と「育つ力」と命名された2つの因子が抽出された。

基準関連妥当性として，加藤ら（2014）の養育態度尺度との相関を検討したところ，父母共に「介入・統制」は，回答者自身の養育態度「統制」と中程度の相関が見られ，併存的妥当性があることが示された。また，「育つ力」は母親の「受容・子ども中心」とやや弱い正の相関が見られたが，父親では r =.18（p <.05）と有意ではあったが極めて弱い値しか得られなかった。このことは，児童中心主義的な発達観である「育つ力」は子どもの主体性を重視しており，必ずしも「私にとっては、子どものことが何よりも優先される」「うちで子どもと楽しい時間をすごす」といった「受容・子ども中心」とは概念的に同じではないことを示す。本来，両変数は独立であるのだが，しかし，受容・子ども中心のような態度を取る母親は，子どもの発達において主体性を大事にしているということが言えるのだろう。また，介入・統制，育つ力の2変数共に中程度の父母間相関が見られており，子育て観も父母間で相関することが示されていた。

さらに，子育て観と結婚満足度と子どもの育ち認識との関連を検討した結果，意味のある相関係数を r ≧ .20とすると，母親の育つ力と子どもの育ち認識との間に極めて弱い正の相関（r =.22,p <.001）が見られていたほか，父親の育つ力と結婚満足度との間にも統計的には有意な結果が見られており，子育て観が父母間や子どもの育ちとの中で創出，変化している可能性が示唆されていた。

第一子年齢と父母間で子育て観に違いがあるかどうかを検討した結果では，統制・介入において交互作用が見られ，父親において7－12歳群が13－18歳群よりも高く，2－6歳群と13－18歳群では母親が父親よりも，7－12歳群では母親よりも父親が高い値を示していた。また育つ力は第一子年齢や父母間で差は見られなかった。統制・介入の結果については，「子どもができないことは，大人がしっかりとできるようにさせるものだ」のように，大人の指導性を前面に押し出した意味内容が多く，子どもが思春期に入ることで，父親が子どもの主体性を重視するようになり，7－12歳よりも13－18歳の方が低くなっている可能性が指摘できよう。「子どもができないこと」は，2－6歳の幼少時と13－18歳では明らかに求められる課題として異なるものであり，その困難さも達成度も違っているであろう。そこで想定されるものが異なるがゆえに，得点が低かった可能性も指摘できる。また，父母の比較では7－12歳でのみ母親よりも父親が高い値であり，2－6歳と13－18歳では母親の方が高かった結果は，母親は子どもの年齢間に統計的な差は見られなかったものの，2－6歳の幼少期や13－18歳の思春期といった子どもの成長発達の著しい時期に父親よりも指導性を必要と認識しており，むしろ父親の7－12歳での高さが特異的であるとも考えることができる。

ただ，これらの点については，本研究の結果だけでは判断できるものではなく，今後さらに検討を深めていく必要があろう。

以上，本研究では長期的な子育て支援に資する子育て観尺度を作成するために，2歳から18歳という広範な第一子年齢を対象として，父母のペア・データを収集し，関連する変数との関連と第一子年齢及び父母間の差を検討した。子育て観尺度は，系統主義的な「介入・統制」と児童中心主義的な「育つ力」の2つの下位尺度を有するものとして作成され，介入・統制の養育態度尺度との併存的妥当性が確認されたとともに，育つ力が，近年耳目を集めている子どもの非認知的な能力の側面に関する育ちとの間に弱いながらも有意な正の相関があることが示唆された。また，第一子年齢と父母間の差の結果からは，育つ力は群間に差がなく，父母共に子どもの年齢にかかわらず安定している可能性が示唆されたが，介入・統制は子ども年齢で変動が見られ，実際的な子どもの姿によって子どもの育ちや子育てに関する信念も変動している可能性が示されたといえる。以上より今後，一層安定した尺度として利用できるよう検討を重ねる必要はあるものの，一定程度の信頼性と妥当性は確かめられたといえよう。

今後の課題として，以下の点があげられる。まず，先行研究（神谷ほか，2023）の項目を修正して分析をしたが，項目選定の段階で想定していた系統主義，児童中心主義にそぐわない「発達観」の項目なども混在していたこと，そのため因子分析の結果脱落する項目数が多かったことがあげられる。今後，事前に想定していた構成概念を必要十分に測定できるような項目を精選，修正していく必要もあろう。また，子どもの育ち認識についても，「非認知能力」に着目したものの，もとよりこの用語はもともと経済学の分野で注目されたのちに心理学分野の諸概念がそこに結びつけられたという経緯があり，概念としての困難さや測定上の課題も多くある（西田ら，2018）ものであり，さらには今回のように広範な子どもの年齢をカヴァーする尺度としては付け焼き刃的であるとの指摘も受けるであろう。

ただし，子どもの育ちについて，かねてより保育現場において主軸とされてきた系統主義と児童中心主義の2軸を取り，保護者の子育て，子育ちに関する認識や信念を問う本尺度は，子育て支援の場において，その他の家庭環境への聞き取りや保護者自身の育児肯定感や不安感などの「子育て感」と同様，その保護者の心理状況を知る一助となるであろう。特に2000年代に入り，「子どもの『育ち』といえば，すぐさま『〇〇ができるようになった』というように能力の定着をもって捉える傾向が，発達の概念の度合いと軌を一にして，強くなりました。そしてこの傾向は，保護者ばかりでなく，保育者にも強くなっているように見えます。」（鯨岡・鯨岡，2007）との指摘が見られるようになってから久しく，近年では，不適切な保育に関する事件が報道されていることなどからも，保護者のみならず，保育者や教師といった子どもに関わる専門家の「子育て観」の測定にも有用であると考えられる。そもそも，子どもの育ちは多様な道筋をたどるものではあれど，基本的な認識として，保育所保育指針，幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領，生徒指導提要などを基盤としつつ，子どもはどのような育ち方をする存在であるかを共有しながら，子どもの育つ場を整えて

いく必要があろう。そこでは，柏女（2019）が指摘するように，公的支援だけに任せず、社会全体で子どもにとっての最善を考えていくことが必要であり，その前提としての子どもの育ちの理解がより一層，一般にも膾炙されていくことが求められる。

文献

江上園子．（2013）．「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響―父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して―．教育心理学研究，61，169-180.

ヘックマン，J.J.（2015）．幼児教育の経済学．古草秀子（訳）．東洋経済新報社．Heckman, J.J.（2013）. *Giving Kids a Fair Chance*. Cambridge MA: MIT Press.

平田裕美．（2018）．父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成．心理学研究，89，221-228.

Huang, J. L., Curran, P. G., Keeney, J., Poposki, E. M., & DeShon, R. P.（2012）. Detecting and deterring insufficient effort responding to surveys. *Journal of Business and Psychology*, 27, 99-114.

神谷哲司・荻布優子・松﨑泰・川﨑聡大（2023）．小学生の保護者を対象とした現代的な子育て観と子どもの学習状況との関連に関する探索的検討―地域社会における成人交流人数にも着目して―．東北大学大学院教育学研究科研究年報，71（2），印刷中.

柏女霊峰（2019）．子どもたちの養育環境を守る子ども家庭福祉政策とは―少子化時代の次世代育成支援策―．政策オピニオン，131，平和政策研究所．（https://ippjapan.org/pdf/Opinion131_RKashiwame.pdf）（参照2023年6月14日）.

加藤道代・黒澤泰・神谷哲司．（2014）．広範な子育て期を対象とした養育態度の検討－鈴木他（1985）を用いた改訂版養育態度尺度作成と子育て期による変化－．小児保健研究，73，672-679.

国立教育政策研究所（2018）．平成30年度「全国学力・学習状況調査」．（https://www.nier.go.jp/18chousakekkahoukoku/index.html）（参照2023年6月14日）.

鯨岡峻・鯨岡和子（2007）．保育のためのエピソード記述入門．ミネルヴァ書房.

Maniaci, M. R. & Rogge, R. D.（2014）. Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48, 61–83.

内閣府（2014）．平成26年度　少子化社会対策白書．（https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26webgaiyoh/indexg.html）（参照2023年6月14日）

内閣府（2015）．平成27年度　少子化社会対策白書．（https://www8.cao.go.jp/shoushi/ shoushika/whitepaper/measures/w-2015/27webgaiyoh/indexg.html）（参照2023年6月14日）

中島常安（2015）．保育指導理論の発達心理学的考察．名寄市立大学紀要，9，1-18.

中道圭人・中澤　潤（2003）．父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連．千葉大学教育学部研究紀要，51，173-179.

西田季里・久保田（河本）愛子・利根川明子・遠藤利彦（2018）．非認知能力に関する研究の動向と課題：幼児の非認知能力の育ちを支えるプログラム開発研究のための整理．東京大学大学院教育学研究科紀要，58，31-39.

OECD.（2015）．*Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills, OECD Skills Studies*. OECD Publishing. Paris, France. 経済協力開発機構（OECD）（編著）．（2018）．無藤隆・秋田喜代美（監訳）．社会情動的

スキル 学びに向かう力．明石書店
小塩真司（2021）．非認知能力　概念・測定と教育の可能性．北大路書房.
菅原ますみ・詫摩紀子（1997）．夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について．精神科診断学，8，155-166.
東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（2022）．非認知能力に関する保育・幼児教育施設の意識や取り組みと園児への影響に関する調査研究報告書．
辻岡美延・山本吉廣（1976）．親子関係診断尺度 EICA の作成：因子的真実性の原理による項目分析．関西大学社会学部紀要，7（2），1-14.
辻岡美延，& 山本吉廣．（1978）．親子関係の類型 親子関係診断尺度 EICA．教育心理学研究，26，84-93.
山田哲也（2018）．家庭の社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力．国立大学法人お茶の水女子大学．保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究．pp.23-27.

付表　子育て観の記述統計量

		父親		母親	
		Mean	*SD*	*Mean*	*SD*
1	多少，社会のルールからはみ出しても，子どもがやりたいことを優先することがあってもよい	2.82	1.19	2.77	1.08
2	子どもには，自分ひとりの力で育っていく力がある	3.54	1.00	3.54	0.97
3	子どもは一人でいても，自分なりに様々なことを学ぶ力を持っている	4.05	0.88	4.06	0.76
4	子どもは大人に教えられたとおりに学んでいくものだ	2.59	1.01	2.58	1.02
5	子どものしつけは，同じ年齢の子どもたちと同じようにしつけていくことが重要だ	2.93	1.07	2.92	1.00
6	子どもの教育は，少しでも早いうちから始めたほうが良い	3.29	1.15	3.44	1.03
7	大人がいろいろと教えないかぎり，子どもは何も学ばない	2.30	1.07	2.28	1.08
8	子どもが楽しく遊ぶためには，大人がその環境を整える必要がある。	3.48	0.95	3.56	0.91
9	子どもにはその子どもなりに，他者とうまくかかわっていこうとする力がある	4.15	0.78	4.08	0.79
10	子どもができないことは，大人がきっちりと教えていかなければならない	3.49	0.97	3.55	0.90
11	子どもの自主性を育むためには，子どもの要求を何でも聞いてあげる必要がある	2.25	1.06	2.20	1.02
12	子どもがさまざまな生活経験を積めるよう，大人が整えていく必要がある	3.75	0.84	3.83	0.74
13	大人が心掛けるべきなのは，子どもが子どもでいられるようにすることである	3.67	0.96	3.70	0.88
14	子どもが育つためには，おとながさまざまな仕掛けを用意していくことが大事である	3.44	0.88	3.40	0.87
15	子どもの健全な心の育ちのためには，怒りや悲しみなどのネガティヴな体験はしない方が良い	2.19	0.99	2.35	1.01
16	子どもには子どもにしか見えない「世界」があるので，その世界を壊さないようにする姿勢が大事である	3.86	0.84	3.89	0.80
17	子どもの成長・発達はだいたいみんな同じようにすすんでいくものである	2.42	1.09	2.30	1.04
18	子どもの成長のためには，子どものやりたいことばかりを尊重するわけにはいかない	3.84	0.96	3.75	0.89
19	子どもを育てるときには，子どもが自分の力を発揮できるまでじっくりと待つことも必要である	3.92	0.89	4.04	0.72
20	子どもの育ちにとっては，悲しさや悔しさを感じ，多少は傷つくことも大事だと思う	4.01	0.83	3.94	0.82
21	子どもが，生活環境に不適応をおこさないように，大人が常にかかわっていく必要がある	3.31	0.96	3.45	0.88
22	子どもの思考や心理は，大人とはまったく違った仕組みでできている	3.66	0.94	3.68	0.94

23	子どもが社会に関わっていくためには，大人がきちんと指導していかないといけない	3.76	0.87	3.87	0.79
24	心理検査や発達検査では，子どもの心のすべては分からない	4.08	0.91	4.06	0.83
25	運動機能や言語機能といった子どもの諸機能は相互に連関しながら発達する	3.97	0.81	3.98	0.77
26	子どもができないことは，大人がしっかりとできるようにさせるものだ	3.29	0.97	3.25	0.85
27	子どものしつけのためには，まったく叱らずに，ほめて育てる方がよい	2.30	1.09	2.34	1.03
28	子どもの主体的な活動を支えるため，大人は子どものすべてを肯定することが大事だ	2.88	1.01	2.92	0.99
29	子どもが戸惑ったり，困ったりしたときは，大人が早く解決方法を示した方がよい	2.79	1.02	2.83	0.94
30	子ども同士がけんかをしていたら直ちに止めるべきだ	2.58	1.01	2.70	0.95

付記

本調査にご協力いただきました調査協力者のみなさま，ならびに，項目作成についてご示唆頂きました加藤道代東北大学名誉教授に感謝申し上げます。

A Study of Parenting Perspectives from Early Childhood to Late Adolescence:

Focus on the Change of First-born Child Age by Pair-Data of Marital Couples.

Tetsuji KAMIYA
(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this study was to develop a scale for parenting perspectives for children's support focusing on parents' understanding and beliefs about their children's upbringing and growth, to understand how parents think about and view child-rearing in modern Japan, where families raising children are becoming increasingly diverse. Based on paired data from 300 parents of firstborn children aged 2–18 years, 30-item factor analysis illustrated two factors: intervention and control, and proactive competence. The validity of the criterion-related relationship with child-rearing attitudes was verified for intervention and control, but it was suggested that proactive competence measures a way of thinking that emphasizes the proactivity of the child, which is rather different from an "acceptance" of child-rearing attitudes. In addition, a low but significant positive correlation was found between the proactive competence of mothers' responses and their child's development, which was also statistically significant for marriage satisfaction. When differences in the scale of parenting and child development perspectives between parents and the age of their firstborn child were examined, no differences were found in proactive competence, but in intervention and control, fathers' scores were higher than mothers' only in the 7–12 age group. These results confirmed a certain degree of validity and reliability with the parenting and child development perspectives for children's support scale and further issues was discussed.

Keywords : parenting, parents, family, marital satisfaction, child-rearing attitudes